走れメロス(6)

太宰 治

(日が地平線に沈もうかとするとき、メロスは刑場に突入しました。)

「私だ、※刑吏! 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる!」と、かすれた声で精いっぱいに叫びながら、ついにはりつけ台に上り、つり上げられてゆく友の両足にかじりついた。群衆はどよめいた。あっぱれ。許せ、と口々にわめいた。セリヌンティウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウス。」メロスは目に涙を浮かべて言った。「私を殴れ。力いっぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君がもし私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえないのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、全てを察した様子でうなずき、刑場いっぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しくほほ笑み、

「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生まれて初めて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない。」

メロスは腕にうなりをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからうれし泣きにおいおい声を放って泣いた。

群衆の中からも、※歔欷の声が聞こえた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人のさまをまじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

「おまえらの望みはかなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

どっと群衆の間に、歓声が起こった。

「万歳、王様万歳。」

一人の少女が、※緋のマントをメロスにささげた。メロスは、まごついた。よき友は、気をきかせて教えてやった。

「メロス、君は、真っ裸じゃないか。早くそのマントを着るがいい。このかわいい娘さんは、メロスの裸体を皆に見られるのが、たまらなく悔しいのだ。」

勇者は、ひどく赤面した。

※刑吏…刑を執行する役人。　歔欷…すすり泣き。　緋…濃く明るい赤。

王の変化

王・ディオニスはメロスとセリヌンティウスとの間の信実を見て、人を信じる心を取り戻す。

- 王城「顔は蒼白」「人の心は、あてにならない。」「信じては、ならぬ。」
- 結末「顔を赤らめて」「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。」

作品を通じて「赤」が象徴的に用いられていることにも注目する。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　――線部「メロス、私を殴れ」とあるが、セリヌンティウスはなぜこのように言っているのか。適当なものを選びなさい。

ア　殴られることで、メロスを許したことを示したかったから。

イ　生まれて初めて、メロスのことを疑ってしまったから。

ウ　メロスが信頼のできる人物だと気づかされたから。

［　　］

(2)　本文ではメロスとセリヌンティウスの姿を見た王が、人の心に対する考えを改めている。王が悟った内容が読み取れる一文を、王の会話文の中から探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□

(3)　本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　メロスに頬を殴れと言われたセリヌンティウスは、事情がわからないながらも友の言う通り頬を殴った。

イ　群衆の背後からメロスとセリヌンティウスを見ていた王は、二人に負けた怒りで顔が赤くなった。

ウ　メロスとセリヌンティウスに対する王の言葉に、群衆の間からどっと歓声があがった。

［　　］